
泡

灯月公夜

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡

【Nコード】

N0675K

【作者名】

灯月公夜

【あらすじ】

直美は思った。泡になって、消えてしまいたい、と。【第四回五

分企画没作品】

泡になって、消えてしまいたい。

そんなことを考えるようになったのはいつからだろうか。直美は夜の海岸に佇み思う。

責めるかのように寄せては返す、漆黒のさざ波。濃度を徐々に高めて行く空を、ただひとつ穿つ満月が、真っ暗な海にただ一筋の道を作っている。まるで明るい未来に導いてくれているかのような、月の蒼い道標。直美はそつと辛い笑みを称える。暗い、真っ暗な自分には、まさに神のお導きとしか言いようがない。

もう、少しの先すら何も見えなかった。月の明るさばかりが際立ち、海は直美を呑みこまんと大口を開けている。早くこっちに来い。暗く、真っ暗な海に直美は告げられた気がした。

それでもいいと思った。もう何も見えない。この空のように、この海のように、もう直美には何もかも見えなかった。

浜辺に打ち寄せる波が、急かすようにやって来ては、もどかしそうに海へと帰って行く。

直美は傍らにいる、愛犬のペロと視線を合わすためにしゃがみ込む。ペロは吹きつける潮風に、寒そうに身ぶるいをしていた。

頭を撫でてやると、ペロはくすぐったそうに喉を鳴らした。

思えば、直美の唯一心から気を許せるのはペロだけだった。ペロと過ごす、我が家だけがたった一つの憩い場だった。

直美の周りには常に仮面と欺瞞で満ち溢れていた。誰もが誰もが詐欺師のように直美は思えてならなかった。そんな中で、心など到底開けたものではない。

ペロの首輪をそつと外し、頭をそつと撫でてやる。嬉しそこの喉を鳴らす様子が、堪らなく愛おしかった。

「どこへでも、好きに生きて」

直美はペロの耳元で囁いた。

「バイバイ」

そして立ち上がり、再び真つ暗な空と海に対峙する。

海面を垂らす蒼い月光は、未来への道標。寄せては返す昏いさざ波は、歓迎の演奏。

裸足になると、直美は一步踏み出した。後ろからペロの声が聞こえてきたが、もう振り返りはしなかった。

身を引き裂くような冷たさが、足のつま先から始まり、くるぶし、膝、腰と這い上がってきた。

直美は思った。まるで身を清めているみたいだと。否、事実、身を清めているのだらう。これから泡となるために。蒼い月光を目印に、直美は真つ暗な海に沈み、そして生まれ変わろうとしていた。

そして直美は、念願の泡となった。

一度泡となってしまうと、ゆらゆらと海水を漂う様子が何とも心地よい事に気付かされた。久しぶりに心が安らかになっていく。それはやがて、浮遊感を孕んだ眠気へと変わり、優しさに包まれながら直美は眼を閉じた。

とても、とても眠い。何年ぶりかの、心地よい眠りの入り口だった。真つ暗な海水の揺りかごに包まれ、月光のほのかなライトを浴びながら目を瞑る。

ふと声が聞こえ、直美は眼を開けた。そこには、たくさんの直美の兄弟姉妹の泡たちがいた。彼らの周りだけが、ほの暗い海水の中で、月のスポットライトを浴びて輝いていた。

直美は心の底から感嘆のため息を漏らす。ここにいるみんなは、直美と同じ。本当の、心の底から分かり逢える仲間たちだ。

きょうだいたちは楽しそうにおしゃべりをしていた。笑い声や、はしゃぐ声。その輪に加わりたちと、直美は心の底から思った。

「あの、」

勇気を出して、近くの彼に声をかけてみた。緊張で、心臓が押しつぶされたようにドキドキする。ちゃんと受け入れてもらえるのだろうか。ぎゅっと、手を握り締める。

彼は笑って、直美を受け入れてくれた。それどころか、手を引いて仲間の輪に連れて行ってくれたのだ。それが、直美には堪らなく嬉しかった。

ここなら、仮面も欺瞞もない。素のままの自分でいられる。直美は、心の底から喜んだ。

そして、それはあまりに幸せな時間だった。信頼できる仲間との対話、触れ合う時間は何にも勝る。直美は何年かぶりに、本気で声を出して笑い、はしゃぎ、時にはふざけて怒ったふりさえしてみた。本当に充実した時間だった。直美は、これが永遠に続けばいいのにと、心の奥底から強く願った。

「あつ」

不意に、直美の目の前の彼、直美が最初に声をかけた彼の泡は弾け、跡形もなく消え去ってしまった。

それはあまりに突然の出来事だった。仲間の皆も驚きを隠せないでいるようだ。

そして、またひとつ、またひとつと仲間の泡は弾け、跡形もなく消え去っていった。

直美は、仲間の泡たちが次々に消えていく様を見つめながら、次は自分なのではないかと恐怖した。

またひとつ、今度は直美の隣にいた彼女の泡が消え去ってしまった。

直美は悲鳴を上げ、飛び退る。

一体どうしてしまったのだろうか。直美にはもう何も分からなくて、ただただ悲鳴を上げるしかなかった。

ついに直美ひとりを残して、他の泡たちは皆消えてしまった。

その時、直美は初めて自分が真っ暗な海水の中にいることを知った。月のスポットは、完全に消えていた。

幸せな時間は、唐突に、泡のように消え去ってしまったのだ。

直美は絶望に押しつぶされ、泣いた。泣いてもどうしようもない事に気付きながらも、ただただ泣くしかなかった。

ひとり残された自分も、やがて弾けて消えてしまふのだろう。泡となった私は、消えてしまふ。

その時、遠くからペロの鳴き声が聞こえてきた。続いてばしゃばしゃという水の音。ペロが自分を呼んでいるのだと、すぐに分かった。

けれども、もうどうしようもなかった。

直美は泡となり、そして消えてしまふのだ。ペロと過ごした我が家での憩い時間も何もかも、先ほどまで泡の彼らと過ごした楽しい時間同様、まるで泡のように。

わんわん、という悲痛なペロの鳴き声。ひとり残された悲しみを叫んでいるようだった。

心の底から後悔した。

けれども、もうどうしようもない。

直美は泡となり、消える。

最後に呟くように、そして叫ぶように直美は何かを言った。

それはペロに対する謝罪だったのか、後悔の懺悔だったのか。

それを最後に直美の泡は、海の中で弾け、消えてしまった。

後には何も残らなかった。

（後書き）

最後まで読んでくださり、本当にありがとうございました！

拙作は、弥生祐さま主催の『第四回五分企画』没作品です。

正直、五分企画用に提出した拙作の『空樽音』と比べて、かなり悩んだのですが、今回の僕の目標である『テーマ性』を考慮した結果、こちらを没にいたしました。

とは言え、拙作を最後まで読んでくださり、本当にありがとうございました！

よろしければ、五分企画用に投稿した『空樽音』もよろしく願いいたします><

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0675k/>

泡

2010年10月8日15時14分発行